

フラクタル

翔平
幸太郎

舞台上、たくさんの花束が置いてある

客入れ

照明、ゆくつりと暗転

1

照明、下手

舞台上に翔平がいる

下手側にある花瓶に挿してある花を一輪、手に取り、花びらを千切りながら

翔平

なあ、花つてのは、どのタイミングで枯れるんだと思う。

枯れると花びらが落ちるだろ。

それってさ、咲いてる時から、既に枯れてるってことだろ。

咲いてる時から既にさ、一枚、一枚、枯れて行ってるってことだよな。

俺たちも、そうだったんだよ。

ずっとそうだったんだよ。

枯れていたんだ。

今はただ、足元に、散った花びらが、腐っていつてるだけなんだ。

それだけのことなんだよ。

腐っていく、花びらの匂い。

俺は嫌いじゃないよ。

俺の本当の姿っていうのかな。

隠す必要なんてなくて、その腐敗していく様が、匂いが、

これが俺なんだって。

自信を持って言えるよ。これが俺なんだって。

翔平、持っていた花を、足元に落とす

踏む

照明、暗転

音楽

2

1

照明、舞台全体
花屋さんのな
翔平が接客している

翔平 こんな感じでよろしいでしょうか。
良かったです。
ちようどいただきます。
どうぞ。
ありがとございます。

翔平、接客を終え、下手側を向く
幸太郎、登場

幸太郎 すみません。
翔平 はい。
幸太郎 花束作って欲しいんですけど。
翔平 はい、少々お待ちください。

翔平、作業を終え、上手側を向く
幸太郎が立っている

翔平 ∴
幸太郎 ∴
翔平 ∴
幸太郎 花束作って欲しいんですけど。
翔平 はい。
∴
どんな感じにしましょうか。
幸太郎 見舞いに持っていけそうな感じで。
翔平 お見舞いですか。
それじゃあ、明るい感じの方がよろしいですね。
幸太郎 匂いが強い奴を。
翔平 匂いが強いものですか。
幸太郎 死にそうなんです。
あるでしょ。
死臭つて言うんですか。そういう匂い。
そういう匂いに負けないような奴。
翔平 かしこまりました。
幸太郎 ∴

翔平、花束を作る

幸太郎 誰が死にそうなのか、気になりませんか。
翔平 ::
どなたが亡くなりそうなんですか。
幸太郎 父です。
翔平 ::
幸太郎 この前まで元気だったんですけどね。
最近倒れたんですよ。
翔平 ::
そうなんですか。
幸太郎 知らない間に、無理してたんでしょうね。
翔平 ::
幸太郎 いや、知ってるのを、知らない振りして、無理してたんでしょうね。
翔平 ::
幸太郎 どう思います。
翔平 ::
私にはちよつと。
幸太郎 ::
そうですね。
翔平 ::
幸太郎 ::
翔平 この花なんてどうでしょうか。
幸太郎 まかせますよ。
店員さんの作りたいように作ってください。
父の枕元に置く花です。
店員さんが好きなように作ってください。
翔平 ::

翔平、黙々と花束を作る

幸太郎 店員さんは何時まで仕事なんですか。
翔平 ::
幸太郎 7時位。
翔平 そうですね。
幸太郎 仕事終わった後って、何か予定あります。
翔平 ::
幸太郎 あつても、キャンセルしてください。
翔平 ::
幸太郎 良いでしょ。

翔平 　　：

翔平、花束を作り終え

翔平 　　こんな感じでいかがでしょうか。

幸太郎 　　良いですね。

翔平 　　では、こちらで。

幸太郎 　　店員さんは、この仕事長いんですか。

翔平 　　3年位ですかね。

幸太郎 　　へえ。

花屋さんになりたかったんですか。

翔平 　　いえ。

そういう訳じゃないんですけど

幸太郎 　　まあ、いいや。

翔平 　　：

幸太郎 　　それで良いです。

いくらですか。

翔平 　　いや、

幸太郎 　　払いますよ。

当たり前でしょ。

翔平 　　：

2,500円になります。

幸太郎、翔平に金を渡す

翔平 　　少々お待ちください。

翔平、下手側で花束にする

翔平 　　どうぞ。

幸太郎 　　7時にまた来ますよ。

翔平 　　：

幸太郎 　　逃げるなよ。

翔平 　　：

幸太郎、退場

翔平、立ち尽くす

照明、暗転

照明、舞台全体

公園的な

幸太郎、翔平の順に登場

幸太郎、下手側に行き、振り返る

ある程度の距離を取って、翔平立っている

幸太郎 　：

翔平 　　：

翔平、土下座をする

翔平 　　すまなかった。

幸太郎 　：

翔平 　　すまなかった。

幸太郎 　：

翔平 　　すまなかった。

幸太郎 　立てよ。

翔平 　　幸太郎、すまなかった。

幸太郎 　立てって。

翔平 　　本当に、すまなかった。

幸太郎 　立てって。

翔平 　　：

幸太郎 　：

立てって。

そんなことしてもらうために、来たんじゃないよ。

翔平 　　：

幸太郎 　：

立てって。

翔平、立つ

幸太郎 　何してたんだよ。

翔平 　　：

幸太郎 　何がしたくて、今まで何してたんだよ。

翔平 　　：

申し訳ない。

幸太郎 　答えろよ。

俺は、兄貴は今まで何をしたくて、何をしてきたって聞いてんだよ。

その答えが、「申し訳ない。」って、おかしいだろ。
答えろよ。

翔平

∴

幸太郎

何で、急に家から出て行ったんだよ。
何が原因だったんだよ。

翔平

何で、この場所が分かった。

幸太郎

俺が質問してんだろ。

何で兄貴が俺に質問してんだよ。

翔平

∴

幸太郎

∴

翔平

コーヒー飲むか。

幸太郎

答えろよ。

翔平

あ、お前はコーヒー苦手だったな。

幸太郎

兄貴。

翔平

何が良い。

幸太郎

兄貴。

翔平

俺買ってくるよ。

幸太郎

兄貴。

翔平

幸太郎、お前何が良い。

幸太郎

兄貴。

翔平

とりあえず、俺何か買ってくるよ。

翔平、振り返って、コーヒーを買いに行こうとする
幸太郎、急いで、翔平が行かないように、腕を掴む

幸太郎

待てよ。

逃げるなよ。

翔平

∴

幸太郎

逃げるなつて。

翔平

逃げないよ。

幸太郎

逃げようとしてるだろ。

翔平

逃げないつて。

飲みたいんだよ。

俺がコーヒーを飲みたいんだよ。

幸太郎

∴

翔平

俺がコーヒーを飲みたいんだよ。

幸太郎

∴

だったら俺が買ってくるよ。

翔平

∴

幸太郎

な。

俺が買ってきてやるよ。

だから兄貴はそこに座って、待っていてくれよ。

翔平 　　：

幸太郎 ほら。

翔平、下手側の椅子に座る

幸太郎、翔平が座つたのを見届けて、退場

幸太郎がいない間、翔平、じつと座っている

幸太郎、缶コーヒーを持って入場

無言で翔平に渡す

翔平、お金を渡そうとする

幸太郎 良いよ。

翔平 　　：

幸太郎、少し距離を取って

幸太郎 ごめん。

何か、妙に感情的になっちゃって。

そういうつもりじゃなかったんだけど。

翔平 いや。

幸太郎 ごめん。

翔平 しょうがないよ。

幸太郎 　　：

翔平 　　：

幸太郎 久しぶり。

翔平 大人っぽくなったな。

幸太郎 まあな。

翔平 　　：

幸太郎 たまたま聞いたんだよ。

翔平 　　：

幸太郎 1年位前かな。

近所の、律子おばさん、知ってるだろ。

あの、賑やかなおばちゃん。

詐欺にあいそうになつたりとかさ。

おばちゃんが、用があつて、たまたまこの街通つたとき、兄貴らしい人見だつて。

翔平 　　：そつか。

幸太郎 だから、結構前から知つてたんだ。

兄貴が、あの花屋で働いてたの。
翔平 ……そっか。

幸太郎 何度か、見に来てた。
話そうと思つて。
でも、声を掛けられなかった。

翔平 ……(親父は)、…

幸太郎 親父には言つてない。

翔平 そっか。
ありがとう。

幸太郎 驚いたよ。
兄貴が花屋なんて。

そういうのとは、まるで無縁な感じがしてたからさ。
言い方悪いけど、地味なイメージしかなかったからさ。

翔平 たまたまだよ。
たまたま、人募集してて、

幸太郎 似合つてたよ。
お客さんに向ける笑顔も、花束作つてるときの顔も、
似合つてた。
俺の知らない、いや、俺たちが知らない、兄貴だった。

翔平 いいよ。

幸太郎 少し悲しかったよ。

翔平 ……

幸太郎 もしかしたら俺、兄貴の楽しそうな顔、うれしそうな顔、初めて見たんじゃないかと思つた。

兄貴は、いつも温和で優しくつたけど、いつも笑顔だつたけど、俺たちが見てた、兄貴の顔は、本当の兄貴の顔じゃなかったんじゃないかと思つた。

翔平 ……

幸太郎、缶コーヒーを開け、飲む

幸太郎 飲めよ。

翔平 ……いただきます。

翔平、缶コーヒーを飲む

幸太郎 よく覚えてたな。
俺がコーヒー苦手だったの。

翔平 苦手だったよな。

幸太郎 あの頃はな。
今じゃ、全然平気だよ。

翔平 そっか。

幸太郎 ：

翔平 ：

幸太郎 聞かないのか。

家のこと。

翔平 そんなこと聞ける立場じゃないよ。

幸太郎 何だよ。

翔平 そりやそらだろ。

突然家を出て、一切連絡もせず、行方不明。

どんな顔して、家のこと心配するんだよ。

幸太郎 良いよ。

聞けよ。

気になってんだつたら、聞けよ。

俺と兄貴しかいないんだから。

翔平 ：

幸太郎 ：

翔平 お前は、何してるの。

幸太郎 家で働いてるよ。

翔平 そっか。

ごめんな。

幸太郎 良いよ。

実際、やってみたら、結構楽しんでやってるよ。

あの頃の兄貴より、良い仕事してるんじゃないか。

翔平 お前は、俺と違って、何でも器用にやれるからな。

親父も、俺より、お前が跡を継いでくれて、喜んでんじゃないか。

幸太郎 そんなことねえよ。

酒飲んで酔ったら、いつも兄貴の話だよ。

俺は、仕事は早いけど、雑過ぎるつて。

兄貴は、仕事は遅くても、丁寧だつて。

でも、職人つてのは、先ず丁寧じゃなきゃいけないつて、丁寧な仕事が、自分の誇りになるんだつて。

翔平 一度もそんなこと言われたことないよ。

ただただ怒鳴られてた記憶しかないよ。

幸太郎 そんだけ兄貴に期待してたんだろ。

翔平 ：

翔平、コーヒーを飲み干し、立ち上がる

翔平 ごちそうさん。

幸太郎 言っただろ。

親父が死にそうだって。
翔平　：
幸太郎　顔見せてやってくれよ。
翔平　：
幸太郎　親父も、兄貴の顔を見たがってるよ。
翔平　言ったのか。
幸太郎　：
翔平　俺が知ってる親父だったら、死んでも、そんなこと言わないはずだよ。
そんなこと言っていないだろ。
幸太郎　言わなくても分かるだろ。
翔平　：（首を振る）
幸太郎　本当に死にそうなんだよ。
いつ連絡来てもおかしくないくらいなんだよ。
顔見せてやってくれよ。
翔平　どんな顔して、いまさら、親父の前に行くんだよ。
幸太郎　どんな顔でも良いだろ。
さっき作った花束持って、
これ、俺が作った花束なんだけど、枕元立つだけで良いだろ。
翔平　：
幸太郎　正直、薬のせいで意識は朦朧としてる。
目の前のことの、どれくらい分かっているのか、
もっと早くに、兄貴に言いに来るべきだったのかもしれない。
でも、急に容体が悪くなって。
今は少し落ち着いてるけど、またいつ急に、
親父のためだけじゃなく、兄貴のためにもさ、
翔平　幸太郎。
幸太郎　：
何。
翔平　ありがと。
でもさ、良いんだ。
俺は親父を裏切った。
きつと、無理したのも、俺のせいなんだろ。
いまさらだよ。
いまさら、親父の前に顔なんて出せないよ。
幸太郎　兄貴、
翔平　放つといってくれて言ってるんだよ。
：
もう、放つといってくれよ。
俺のことは忘れてくれ。
親父もきつと、俺のことなんて忘れてるよ。

幸太郎 そんなわけねえだろ。
翔平 お前も俺のことを忘れてくれ。
あ、そういえば、駄目な兄貴いたな位でさ。
10年に一回くらい、何となく頭よぎる位で、で、それを迷惑に感じる位でさ。
幸太郎 何言ってるんだよ。
翔平 それで良いだろ。
幸太郎 兄貴。
翔平 な、それで良いんだよ。
幸太郎 そんなことねえよ。
翔平 ∴
幸太郎 そんなことねえよ。
翔平 ∴
幸太郎 確かに、兄貴のことを恨んだ時もあったよ。
ていうか、ずっと恨んできたよ。
でもさ、
∴
でもさ、
∴
5年経って、俺だって、いろんなこと思えるようになったんだよ。
兄貴もつらかったんだろうなって。
さつき言ったら。
花屋で働いてる兄貴の顔見て、悲しかったって。
∴
ずっと我慢してたんだろ。
兄貴、いろんなこと、ずっと我慢してたんだろ。
それでどうにもならなくなって、逃げるしかなくなってたんだろ。
翔平 やめる。
幸太郎 な。
親父も俺も、兄貴のこと、怒ってなんかないよ。
翔平 やめる。
幸太郎 だって、俺たち親子だけ。
翔平 ∴
幸太郎 今、親父に会わなきゃ、兄貴も俺も、絶対に後悔する。
だからさ、
翔平 やめろって。
幸太郎 ∴
翔平 もうたくさんだよ。
幸太郎 ∴
翔平 本当にさ、もうたくさんなんだよ。
幸太郎 ∴

翔平 後悔する。
ずっと後悔してきたよ。
我慢してた。
ずっと我慢してきたよ。
当たり前だろ。

幸太郎 :

翔平 幸太郎。
お前勘違いしてるよ。
俺が、親父が嫌で、家を出たと思ってるのか。

幸太郎 :

翔平 違っよ。
俺が嫌だったのは、
:
幸太郎、お前だよ。
:
お前が嫌で、
お前のことが心の底から嫌いで、俺は、あの家を出たんだよ。

幸太郎 :

翔平 ずっと、俺が親父が嫌で、家を出たと思ってたのか。
残念。
親父じゃない、お前なんだよ。

幸太郎 何で。

翔平 お前、そんなこと、微塵も考えたことないだろ。
だって、お前、ずっとみんなに好かれてもんな。

幸太郎 兄貴、嘘だろ。

翔平 お前が小さかったときに、おふくろ死んだだろ。
そつから先、俺が、どれだけ我慢してきたと思う。
親父はあの通りの職人、職人してたし、家のことだったり、お前のことだったり、まあ、
そりゃあ大変だったよ。
そんな中で、お前はさ、常に自由で、キラキラしてて、人気者だったよ。

幸太郎 ちょっと待てよ。

俺はちゃんと兄貴に感謝してたよ。
兄貴がいたから、俺が自由にさせてもらってるんだつて。
周りの人もみんな言ってただろ。
しつかりものの兄貴がいて良かったなつて。

翔平 疲れたんだよ。
しつかりものの兄貴つてものに。
疲れちゃったんだよ。

幸太郎 嘘だよ。

翔平 お前さ、大学行きたいって言っただろ。

幸太郎 ああ。
兄貴も応援してくれてだろ。

翔平 ああ。
応援したよ。
頑張れって。
でもさ、そんなの嘘だよ。嘘に決まってるだろ。
応援なんてするわけないだろ。

幸太郎 :

翔平 あの時にご、俺の中で何か、ぶつって切れちゃったんだよ。
だっておかしいだろ。
俺だって、大学に行きたかったよ。
大学で、無責任で楽しい生活を送りたかったよ。
俺は何だ。
毎日、毎日、工場で親父と働いて、お前の学費と生活費稼ぐだけなのか。
それが俺の人生なのか。
俺の人生は、お前の人生という大きな絵の中の、一つの、これっぽちの存在なのか。
絶対嫌だ。
そんなの絶対嫌だ。
だつて、ずっと我慢してきたんだぞ。
お前が俺の人生に含まれるよ。
俺に振り回されて、お前の人生が決まっていけよ。
仕事が早い。雑だ。
そんなのどうでも良いよ。
どうでも良いんだよ。
ただ単純に、お前は、俺と言う人間の人生によつて、今のお前の人生があるんだよ。
それが何より大事なことなんだよ。
俺にとって、それだけがあれば良いんだよ。

幸太郎、翔平の胸倉を掴む

幸太郎 お前な。

翔平 なんだよ。
殴れよ。

幸太郎 :

翔平 殴れよ。
悔しいだろ。
お前言ってたよな。
俺のこと地味だつて。
地味な俺に、キラキラしたお前が振り回されて、悔しいだろ。

幸太郎 :

幸太郎、翔平、睨みあう
翔平、幸太郎の顔に唾を吐きかける

幸太郎 ・・
翔平 ・・

幸太郎、翔平を抱きしめる

幸太郎 ありがとう。
翔平 ・・
幸太郎 兄貴、ごめんな。
ごめんな。
翔平 ・・
幸太郎 でもさ、ありがとうってしか、俺言えねえよ。
翔平 ・・

幸太郎、翔平を放す
翔平、崩れて、泣きじゃくる

幸太郎 俺さ、それでも兄貴のこと嫌いになれねえよ。
だつてさ、自慢の兄貴だつたんだぜ。
親父だつて、兄貴のこと、自慢の息子だつたんだぜ。
俺たちがさ、知らないうちに、兄貴のこと追い詰めてたんだよ。
花屋にいる兄貴さ、キラキラしてたよ。
兄貴から花買って行った人もさ、キラキラしてたよ。
・・
兄貴が俺のことをどう思つても、構わないよ。
でもさ、頼むからさ、親父に、兄貴の顔を見せてやつてくれよ。
親父の顔を見てやつてくれよ。
翔平 ・・
ごめんな。
幸太郎、ごめんな。
ごめんな。
幸太郎 明日、迎えに行くよ。
一緒に帰ろう。

照明、暗転

照明、舞台全体 うす暗く

下手側にある花瓶に挿してある花を一輪、手に取り、花びらを千切りながら

翔平 なあ、花つてのは、どのタイミングで枯れるんだと思う。
枯れると花びらが落ちるだろ。
それつてさ、咲いてる時から、既に枯れてるつてことだろ。
咲いてる時から既にさ、一枚、一枚、枯れて行ってるつてことだよな。
俺たちも、そうだったんだよ。
ずっとそうだったんだよ。
枯れていたんだ。
今はただ、足元に、散った花びらが、腐っていつてるだけなんだ。
それだけのことなんだよ。
腐っていく、花びらの匂い。
俺は嫌いじゃないよ。
俺の本当の姿っていうのかな。
隠す必要なんてなくて、その腐敗していく様が、匂いが、
これが俺なんだつて。
自信を持って言えるよ。これが俺なんだつて。

翔平、持っていた花を、足元に落とす
踏む

翔平、鞆を持って退場

幸太郎、階段付近で

幸太郎 兄貴。
兄貴。
：
兄貴。

幸太郎、舞台に駆け込む

幸太郎 ：
なんでだよ。

舞台上の花束を投げつけたりしながら

なんだよ。
なんだよ。

章 葉
照 明、 暗 転

了